

担任の個別指導力をサポートする校内工夫事例

個別指導をより充実したものにしていくためには、個々がスキルを高めることに加えて、組織的バックアップが欠かせません。Chapter 4では、組織的に個別指導を充実させる取り組みを行っている学校を6校ご紹介。ツールでの支援でも、体制での支援でも、共通しているのは、生徒を理解し意欲や主体性を引き出すための工夫。教員が一丸となって学校を挙げて取り組むことで、生徒に変化が表われてきた好例をお届けします。

取材・文／永井ミカ

ツールでサポート

CASE STUDY

1

週1時間、総合的な学習の時間を使い 生徒全員がプランニングノートに記入

福岡・私立

九州国際大学付属高校

さまざまな先生が取り組んだ
ノート活用の実績がヒントに

2010年、それまでの男子部・女子部を統合し男女共学となった九州国際大学付属高校。生徒への手厚い指導をうたう進学校である。

同校が生徒全員に対して取り入れているのが、自己マネジメントプログラム「夢橋」^{ゆめたちはな}。1週間単位の生活プランノートで、毎週金曜日、総合的な学習の時間を使い、今週の反省点や次週の計画を記入する。ノートは担任に提出、担任はチェックとコメント記入をして返却する。

導入に際して中心的役割を担った一人が教頭の藤田信一郎先生。「以前から本校では、個別に学習記録帳的なものをつけるクラスや学年がありました。担任の負担は増えますが、そういうクラスや学年は、運営がうまくいく、進路実績が出るなど、結果が出せると気づいたんです」。

男女共学スタートに合わせて学校改革に取り組んでいた同校では、学習

School Data

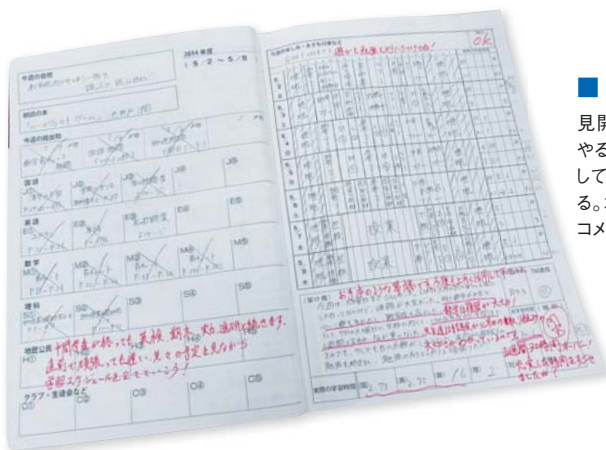
1958年創立／普通科／生徒数1752人(男子976人・女子776人)／進路状況(2013年度実績)大学71.4%・短大5.0%・専各11.6%・就職1.2%・その他10.8%

記録帳を全学年・全生徒に導入することにした。参考のためにと視察したのは、さまざまな先進的な取り組みを実施していた須磨学園高校(兵庫県)。同校の成功例に学び、学習記録だけにとどまらず、未来に向けての予定も記入するノートを導入した。

授業時間を使いしっかり計画を立てることで、生徒の家庭学習の時間が増え学力アップにつながった。そして「予想以上の効果があった」と藤田先生が言うのが、「架け橋」と名付けられたフリーコメント欄だ。「話すのが苦手な生徒でも、進路や部活動の悩みなどをかなりびびり書きすることがあります。単なる学習時間の管理だけでなく、こういうコメントから担任が生徒の様子を知り、コミュニケーションできる効果は大きいと思います」。

■ 自己マネジメントプログラムノート「夢橋」^{ゆめたちはな}

見開きで1週間分。左ページが提出物ややるべきことなどの記入欄。できたことは消していくので、残っていることが一目わかる。右ページはタイムスケジュールと、フリーコメント欄。赤字が担任からのメッセージ。



ツールでサポート

CASE STUDY

2

自己管理能力や書く力を養う
タイムマネジメント手帳

京都・私立

京都橘中学・高校

書くことが目標や夢を
意識することにつながる

能率手帳のプログラムを活用し、生徒全員がタイムマネジメントを実施。一部のクラスや中学部で試行錯誤をしていたが、手帳を使うことで生徒の自立心が芽生えたり、成績の上昇が見られたため、2011年から正式に導入した。ねらいは自己管理。「目標達成のためには、目の前の小さなことをクリアしていくことが大切だと伝えたい。また、書くことで目標や夢を意識し始める効果もあると思います」と進路指導部長の橋本治代先生は語る。

手帳には主に1週間の予定と学習の記録を記入するが、毎日きっちり記録しなくてもよい。学年やクラスにより、無理のない範囲で行っていくのがポイントだ。例えば、まずはテスト前1週間だけつけるところから始めるクラスもあるという。担任は原則週に一度チェックしてコメントを書き、生徒理解の一助にする。また、保護者にも生

■ タイムマネジメント

書き方の指導はするが、あまり細かいことまでは決めず、生徒が自分で行事を書き込んだり、表紙などを自分らしく飾ったりしている。「愛着をもって日々活用してほしい」と橋本先生。大学生になっても続ける生徒もいるという。

School Data

1902年創立／普通科／生徒数1092人(男子510人・女子582人)
／進路状況(2013年度実績) 大学81%・短大4%・専各7%・就職1%・その他7%



徒の様子をフィードバックして、情報を共有することもある。

ちなみに、同校では普段から「書く力」をつけることに力を入れている。例えば、板書なしで授業の内容をノートに書かせたり、話を聞きながらメモをとらせたり。手帳はこうした「書く力」の育成にも役立つという。

ツールでサポート

CASE STUDY

3

教員全員にタブレット端末配布
生徒情報を一元化・共有

広島・私立

広陵高校

面談に必要な書類が
すぐに取り出せる

反転学習などを取り入れICT教育の先進校として注目されている広陵高校。ITを活用した校内コミュニケーションの活発化にも積極的に取り組んでおり、教員全員に配布した「Pad mini」を使い、生徒情報一元管理やペーパーレス会議などを実現させている。

校長の中土基先生は1・2年生と進路面談を実施。その際参考にする生徒情報を徐々にデジタル化するよう担任の先生方に指示し、生徒情報の一元化を進めた。使ったのは「OneDrive」というデータベースソフト。扱いが簡単で初心者にも抵抗感なく入りやすいのだそうだ。

「これまで別々に管理していた生徒の環境調査書、成績、個票が一度に閲覧でき、面談の内容をメモするスペースもあるため便利になりました」と1学年担任の船坂洋樹先生。「ペーパーレス会議も同じです。必要なものはプ

■ 生徒情報を共有化

生徒情報を共有化するためのフォーマット。膨大な印刷物や書類をシュレッダーにかける手間がなくなった。担任以外が面談するときなどに活用しやすい。

School Data

1958年創立／普通科／生徒数1337人(男子818人・女子519人)
／進路状況(2013年度実績) 大学57.6%・短大6.8%・専各19.7%・就職13.7%・その他2.2%



リントアウトもしますが、そのほかの書類も欲しいときにすぐに手もとで開くことができるので、担任業務も効率的になります。今後、生徒の提出物の管理や、進路指導部内の大学情報の教員間共有化なども実施していきたいと考えた。

主体的な行動意欲を引き出す コーチング面談を全教員が実施

東京・私立

小野学園女子中学・高校

「どっちもできる」になるために
自分で考えて自分で選ぶ

小野学園女子中学・高校は教育の

ねらいとして「どっちもできる」を掲げている。それは社会で生きること、家庭で生きること、また両方でも、自由に選べる力を身につけることなのだという。「けれども9年ほど前、選ぶためにはもっと主体性を身につけないと、という議論がもち上がったので」と語るのは、進路対策部長の小山伸浩先生。「そして、これまで生徒を指導しすぎていたのではないかと気づいた」のだと言う。

そこで当時、ビジネス界で話題となっていたコーチングを面談に取り入れることを考えた。まず、小山先生を含めた3人の先生が3日間の外部研修を受けた。「主体性を引き出すために、まずは相手の話を傾聴するという点が大変でした。教員というのは指導やアドバイスをすることが役割だと考えていたのだ」と小山先生。しかし、その後も勉強を重ねるにつれ、「生徒自

身が納得して自分から言葉を発し、決めたことに対しては、力を発揮できるし、本人の幸福につながる」と考えられるようになってきた。

以降は1年に1回、校内で全教員向けの研修を実施。そして、現在では各担任が、通常の面談とコーチング面談を使い分けながら個別指導を行っている。基本的にコーチングでは相手からの発言を待つが、ただ聞くだけではなく、「いつまでに決められそう？」などと問いかけ、期限が来たら報告させるなど、面談のスキルも上がっている。

「話を聞いてもらえてうれしかった」など生徒の評判もよく、データ上でも主体性が育っていることが確認できた。「自分で決められる生徒や、少し上の目標を目指して努力してみようという生

徒が増えてきたのかなという実感が
あります」と小山先生は言う。

担任以外が生徒を評価する
「みとめる・ひきだす」シート

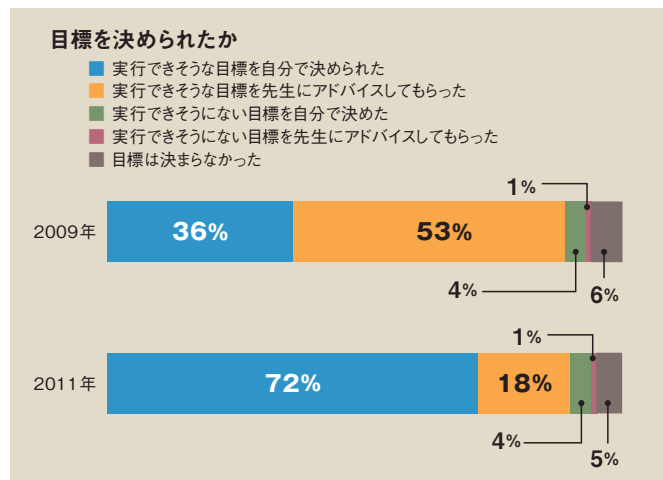
さらに、同校では面談用のツールとして「みとめる・ひきだす」シートを活

School Data

1932年創立／普通科／生徒数(高校のみ)222人(女子のみ)／進路状況(2013年度実績)大学72.1%・短大7.1%・専各18.6%・就職0%・その他2.3%

■ コーチング面談の評価についての経年変化

「実行できそうな目標を自分で決められた」が倍増しているところに、効果が見える。



■ みとめる・ひきだすシート

左端の縦軸に生徒の名前が入る。全教科担当、クラブ顧問が記入。

○年○組	現代文	古典	英語R	英語G
A	非常に読解能力が高く、頭の回転も速い。今後自分である程度の負担をかけていかなないと物足りなくなるかも。		絵が非常に上手い。相手をしっかり観察して見事に特徴をとらえた絵は立派。授業中のオン・オフが激しく、時々ま集中力を欠く場面も見られるが、オンになり集中しているときのAさんは誰よりも授業を盛り上げてくれる。持ち前の明るさで後期も授業を盛り上げてほしい。	
B	独特の字は健在。高い向上心をいかに持続させ、実行に移すかが今後のカギ。		非常に熱心で負けず嫌いなどところがとてもよい。単語テストではいつも安定した点数をとり、平均78点はクラス3位である。後期は満点を狙った勉強をすることによって、より単語が定着するだろう。生徒会でもその明るさと真面目な態度で周りからの信頼を集めている。(後略)	
C				

用。エクセルで管理しているシートで、縦軸に全生徒の名前があり、横軸は教科やクラブになっている。定期的な面談期間の前に、全教科担当とクラブ顧問が生徒一人ひとりについてフリーコメントを記入。担任はそれを見ながら面談を行う。「いいところを認め、眠っているいいところを引き出す」という同校の教育ビジョンを具体化するために活用されている。

学校体制でサポート

CASE STUDY

5

担任以外の全教員が参加する
「キャリア・カウンセリング」

秋田・県立

十和田高校

進路についての本音を引き出す
担任以外とのカウンセリング

担任以外の教員が生徒と面談を行う十和田高校の「キャリア・カウンセリング」。1年生と2年生の2月に行うもので、校長以下全教員が1人につき10〜12人程度の生徒を受けもつ。生徒はあらかじめ所定のシートに自己分析やキャリアプランを記入するが、当日はその用紙は見ずに面談にのぞむ。時間も場所も生徒がアポをとって決める。

「ねらいは大きく2つ」と進路指導部の小林稔幸先生。「生徒がプレゼンテーションの技術を高めることと、カウンセリングを通して生徒自身が自己理解することです」。以前から、進路希望調査に本当の希望を書いていたことがあったため、生徒のプレゼンを通して教員が質問し、生徒の気持ちを引き出そうという試みだ。

「楽しいことや好きなことについて質問すると、びっくりするほど話をする生徒もいます」と小林先生。教員の

ダウンロード可

■ キャリア・カウンセリングシート

「楽しいと思えること」「苦痛に感じること」「やってみたいこと」などを書く欄がある。

School Data

1943年創立／普通科／生徒数297人(男子144人・女子153人)
／進路状況(2013年度実績)大学9.3%・短大7.4%・専各32.7%・就職50.6%

アドバイスは最小限にとどめ、とにかく話を聞く。面談後は担当教員がコメントを書き、保護者にもコメントを書いてもらう。そして、生徒も面談を振り返り感想を書く。「1人につき30分から1時間くらいかかりますが、私自身、あまり接点のない生徒を知ることができる面談を楽しみにしています」。

学校体制でサポート

CASE STUDY

6

「総合学科」として
進路について手厚く支援

茨城・県立

取手第一高校

本人が納得できる
分野・科目選択を

2003年、単位制の総合学科に改編した取手第一高校。生徒は2年次より文科系、理科系、メカニク、ビジネス、情報技術の5分野に分かれて学ぶ。

改編時より、生徒が納得して学びたい分野に進むことが何よりも大切と考えていた同校。総合学科の大規模校であることなどの理由で加配があるため、1年次では1クラス3人担任が実現している。40人のクラスに正担任が1人。そして2人の副担任が生徒を20人ずつ受けもち、「産業界と人間」の授業を担当し分野選びや科目選択を手厚くフォロー。各分野の基礎科目をローテーションで体験できる「分野基礎」をはじめ、多くの体験授業や選択の指導も用意されている。

「分野選びは将来を左右する選択なので、担任と副担任がたび重なる面談を実施し手厚く指導。生徒一人

School Data

1943年創立／総合学科／生徒数714人(男子338人・女子376人)
／進路状況(2013年度実績)大学43.6%・短大2.5%・専各37.7%・就職12.7%・その他3.3%

ひとりの意思決定の助けとなつていきます」と1年次主任の石塚剛先生。同校には1年次の教員だけの職員室があり、各分野の教員もバランスよく年次に配置されていることから、教員同士が話し合ったり、生徒も専門家の意見を身近なところで聞ける環境が整っているそう。

「人数調整も行わないので、2年次からは分野混合クラスができることも。けれども最優先されるべきは、学校の都合ではなく生徒が納得して学べる環境。じっくり選んでいるためか、2・3年生のモチベーションも高いと実感しています」と、産社コーディネーターの佐藤雅巳先生。納得して選んだ生徒たちは授業態度なども良好で、同校は進路実績も着実に伸ばしている。